

住職 近況

『芝浜』という古典落語があります。こんな噺です。酒におぼれて働かない魚屋の勝五郎は、芝の浜で思わぬ大金を拾う。これで働かなくていいと喜ぶ勝五郎だが、女房が機転をきかせて、あれは夢だったと言いくるめる。心を入れ替えて酒も断って働いた三年目の大晦日……。

噺しおわるのに、小一時間はかかる大作のラストシーンで、女房が亭主に酒をすすめます。改心して一生懸命に働いたご褒美です。三年ぶりの杯をオットトットと口もとまでではこんだところで、除夜の鐘が聞こえてきます。勝五郎が言います。「まもなく今年も明けよう」。

さて、この情景は大晦日の何時頃のはなしでしょうか。江戸の庶民は、「空が白み始める明け六ツが起床時間。町の木戸が開き、店も開く。六ツ半になると大工など職人が出勤して五ツから仕事を始まる。日が沈みきって暗くなる暮れ六ツで、職人は仕事じまい。銭湯に行つてから夕飯を食べる。夜四ツ、木戸が閉まって就寝となる」とは、現在法政大学学長を務める田中優子氏の著書『江戸っ子はなぜ宵越しの銭を持たないのか?』（小学館新書）の記述です。

江戸時代は、一刻（とき）の時間が夏と冬では異なる不定時法を採用していたから、大晦日頃の明け六ツは今の午前六時頃で、暮れ六ツが夕方五時頃。そして、就寝時間の夜四ツは九時半頃になります。『芝浜』の勝五郎は、仕事を終えて、湯屋（ゆーや）銭湯へ行つて、そのまま長屋へ帰ってきますから、除夜の鐘を聞いたのは、午後六時か七時でしょう。田中優子氏は前掲著で次のようにも書いています。

「かつては日没になれば次の日だったので、夜はもう新年だ。〈途中略〉その大晦日の食事こそがお節、季節の節目を祝う節日の食事であった。〈途中略〉除夜の鐘はこの夜に寺が撞いた鐘のことだが、夜中に年を越すわけではないので、日没後に適宜、撞いていたのであろう」

松岩寺も本来の由緒正しい除夜の鐘の時刻、たとえば夕方五時とかにもどしたいのですが、どう思いますか？